

『自己責任という暴力』

齋藤雅俊

未來社／2020年8月／2000円（税別）

日本には、国家権力と世間という権力の二重構造が厳然と存在し、前者は法律という明文化されたルールに従って裁判などを通して社会を機能させる一方、後者は明文化されていない暗黙の掟に基づいて情緒的な処罰が罷り通る世界を現出させる、と著者は述べる。副題に「コロナ禍にみる日本という国の怖さ」とあるように、昨春の日本国内で猛威を振るったいわゆる自粛警察や強烈な同調圧力は記憶に新しい。主観的には正義や道徳を追求する「世間」が強く求める「(自己)責任」というキーワードで、こうした日本社会の在り方を鋭く炙り出している警告の書であり、読みごたえがある1冊である。

『漂流者の生きかた』

五木寛之・姜尚中

東京書籍／2020年7月／1300円（税別）

異なる分野で活躍を続ける知性の塊のような両者の数度にわたる対談集である。先を見通すことが困難な「不確実性の時代」を我々がどう生きるかについて、示唆に富む内容が満載で、刺激的である。

『人新世の「資本論」』

齋藤幸平

集英社新書／2020年9月／1020円（税別）

シベリアの永久凍土が溶け、とんでもない増殖力をもった未知のウイルスが出てきた、という報道があった。この例を出すまでもなく、地球温暖化対策の成否が人類の運命を決める。「この10年が分かれ道」だとすれば、今私達は「歴史の転換期」にいる。

資本主義は「成長し続けねばならない」システムであり、地球温暖化を止めることはできない、と著者は主張する。それに対して、本書では「脱成長」と、森林などの「富」の共有（コモン）の回復がなされなければならない、とする。これがこんにち求められるマルクスの読み方であり、『資本論』にまとめられていなかったマルクスのノートなどに記述がある、とする。傾聴に値する、と感じた。

ところで、歴史の転換期には未来社会の萌芽が現れる。原始から文明への転換期には国家が生まれ、やがてそれが広がっていった。著者の論になぞらえれば、米国の若者たちのサンダース現象やグレッタ＝トゥンベリさんらの動きが、その萌芽であろうか。

『民衆暴力——一揆・暴動・虐殺の日本近代』

藤野裕子

中公新書／2020年8月／820円（税別）

すでに多くのメディアで書評があるので、ここでは高校での授業化の観点で取りあげたい。誰に対して何を理由に民衆が暴力を行なったのかについて、単純化せずに考えることが、近代を捉える上で重要だと本書でよくわかる。近代は歴史総合で一度扱い、さらに日本史探究でも学ぶ。それならば本書を元に教材を作成し、生徒には時間をかけて探究させたい。

『カカ・ムラド～ナカムラのおじさん』

ガワフラ原作、さだまさし、他 訳・文

双葉社／2020年12月／1500円（税別）

地理総合でも歴史総合でもSDGsを扱うことが求められる。中村哲医師の事績はその教材として適切だ。本書はアフガニスタンのNGOが製作した絵本の日本語訳で、中村による水路の開削までの話が、絵とともに端的に記されている。原作は子ども向けとのことだが、文章量は絵本にしては多く、挿絵入りの易しい伝記と言える。

『マンガ人類学講義 ボルネオの民には、なぜ感謝も反省も所有もないのか』

奥野克巳、MOSA

日本実業出版社／2020年10月／1800円（税別）

全編ほぼマンガだからといって侮ってはいけない。本書には、著者である立教大学異文化コミュニケーション学部の奥野克巳教授によるボルネオにおける狩猟採集民族「プナン」の実生活のフィールドワークを通して、人類学の本来の在り方についての強いメッセージが込められている。人間は何のために生きているのか、その価値観や自然、動物との関わり方について、人類学的アプローチから非常に考えさせられる。しかし本書は、人類学を学ぶ者以外にとっても示唆に富んでいる。人類学が社会的な骨組みを明らかにする研究のみではなく、何てことはない人々の日常生活の現実の中から我々が学ぶべきものを紡ぎだしていくものだという視点が、社会科学には必要であることを改めて教えてくれている。著者が引用している人類学者インゴルドの「人類学は人々について何かを言う学問ではなく、人々とともに学ぶ学問である」という言葉が、強く心に残った。